

よ なかあんのん
▲世の中安穩なれ 仏法ひろまれ ー親鸞聖人のご往生ー

親鸞聖人が、八十四才の時、息子の善鸞と親子の縁を切るという、悲しく寂しい事件が起きました。しかし、その後も、親鸞聖人は、執筆活動に尽力なされます。親鸞聖人が八十六才の時に、ある法語を弟子に伝えます。それを『自然法爾章』といいます。この教えは、親鸞聖人の信仰の境地といわれています。それは、あらゆるはからいを捨てて、あるがまま、そのままに物事を受け止めるということです。あるがまま、そのまま阿弥陀様に全てをお任せするということです。簡単なようで、なかなかできることはありません。

1263ねんいちがつ16にち きゅうれき1262ねん11がつ28にち しんらんしょうにん
一二六三年一月十六日（旧暦一二六二年十一月二十八日）、親鸞聖人は、ご往生なさいます。お亡くなりになる最後のときまで、一切世間のことは口にせず、ただただ、お念仏を申しておられたそうです。お亡くなりになられたそのお姿は、仏教の祖、お釈迦様がお亡くなりになられたときと同じように、頭を北に、顔を西に向け、右脇を下にしておられたようです。

せいぜん しんらんしょうにん
生前、親鸞聖人は、

じぶん いのち つつ わたし いたい かもがわ なが さかな
「自分の命が尽きた時には、私の遺体を加茂川に流し、魚にあたえなさい。」
ゆいごん のこ ことば いと からだ しんらんしょうにん
と遺言を残されたそうです。この言葉の意図としては、この体ではなく、これまで親鸞聖人が人生を懸けて説いてきたお念仏の教えを大切にしないとの最後のメッセージであったのかもかもしれません。しかし、残された者の自然な想いとして、その遺言に従うことはできませんでした。残された遺族は、その遺体を火葬し、お墓を作り、そこに埋葬します。そのお墓が小さなお堂となり、さらに発展して、今日の本願寺となります。そして、その親鸞聖人が残してくださいましたお念仏の教えは、代々伝えられ、今では、海を越えてアメリカへ、そして、世界中へと広がっています。

2012ねん1がつ16にち しんらんしょうにん な 750ねんめ めいにち
二〇一二年一月十六日は、親鸞聖人が亡くなられてから、七百五十年目のご命日でした。

きょうと ほんがんに ざくねん4がつ しんらんしょうにん750かいだいおんきほうよう つづ ほうよう
京都の本願寺では、昨年四月から親鸞聖人七五〇回大遠忌法要を続けてきました。この法要のテーマが、「世の中安穩なれ」でした。安穩な世の中の実現のためには仏法が広まることがかかります。不可欠です。「世の中安穩なれ 仏法ひろまれ」これは、親鸞聖人が、お手紙かかれた一節です。浄土真宗の門徒として常に心の中にもっておかなければいけない教えです。世の中の安穩のため、仏法が広まって行くように、今後精進していきます。

がつしやう くすのきかつや
合掌 楠活也